

マイカズン・マイヒーロー

古堅元貴

【人物一覧表】

峯田康太	(29)	フリーター	役者志望
辻優人	(21)	フリーター	康太のいとこ
峯田景子	(53)	康太の母	
辻由加里	(50)	優人の母	
峯田薫	(90)	康太と優人の祖母	
峯田タカオ	(95)	康太と優人の祖父	

○浦安・物流倉庫

深夜。50人以上のアルバイトがピッキング作業をしている。

その中の1人、峯田康太(29)。

○同・喫煙スペース(夜)

休憩中。談笑しながら吸ってる人が多い中、隅で1人、電子タバコを吸っている康太。

○マイクロバス内(朝)

駅へ向かう送迎バス。車内にはびっしりとバイト終わりの人たちが座っている。その中に康太。手には文庫本。

康太「(うたた寝している)」

変な体勢で寝ているせいで、ページに変な折り目が付いてしまっている。

○葛西駅(朝)

改札から出てくる康太。改札へ入って行く多くのスーツ姿の人達。康太と同世代くらいの人たちが目に入り。

康太「(自身に劣等感)」

○康太の一人暮らしのアパート(朝)

8畳ほどのワンルーム。帰宅した康太。棚には本や映画、舞台のDVDが並んでいる。

康太、バッグから文庫本を出し、部屋内のモノを利用して折り目が付いてしまったページの皺を伸ばそうとする。しかし皺は直らず。

冷蔵庫から缶チューハイを取り、飲むと、スマホにLINE受信音。確認すると母からだ。

康太「(メッセージの内容に言葉を失う)」

○葬儀場・待合室(日替わり・朝)

康太の祖父・峯田タカオ(享年95歳)の家族葬の開始前。

康太、康太の母・峯田景子(53)、祖母・峯田薫(90)が座っている。

薫「お医者さんが、本人も亡くなったこと気づかないくらい、全く苦しまずに、寝てる間に、天国へ向かったんじゃないかって」

景子「ある意味、いちばん幸せな最後よ」

薫「亡くなる前の日なんて、いつも食べてるおかずなのに、これはおいしいなんて、わざわざ私に言うって」

景子「ある意味、死期を悟ってたのかもね」

薫「最後だけ仏のようになって・・・。康太、この前出てたね、ドラマ」

康太「え、ああ、ほんの一瞬だったけど」

薫「すぐ康太だって分かったよ。それね、おじいちゃん

と一緒に見てたんだよ。おじいちゃんね、いつも康太と優人のこと、気にかけてた」

康太「(自身の力なさを感じる)」

そこに従兄弟の辻優人(21)と優人の母・辻由

加里(50)が到着。

由加里「あー、お母さん、姉さん」

薫「由加里」

景子「迷った？」

由加里「この辺、昔と変わりすぎててー。え、康太？久しぶり。わかる？あ、優人」

優人「(康太に会釈する)」

康太「久しぶり(優人に会釈する)」

12年ぶりの再会でぎこちない2人。

### ○告別式会場

出棺前のタカオとの、最後の対面。

泣き崩れている薫。それを支える景子と由加里。

その横に康太と優人。

スタッフ「(康太に)最後にお言葉、かけてあげてください」

康太「(何と声をかけたらいいか、考えてると)」

優人、タカオに近づくと。

優人「おじいちゃん。ありがとう。ずっと会わなくてごめんなさい」

泣き崩れる優人。その姿に驚く由加里。だが薫の

介抱で手が離せない。優人、それに気づき。

康太「(恐る恐る、優人の背中を擦る)」

優人「(康太のおかげで、少し落ち着く)」

○葬儀場→道(昼)

火葬場へ向かう霊柩車。

○火葬場・火葬炉

タカオの棺が火葬炉へ入っていく。それを見守る家族たち。

○火葬場・待合室(昼)

収骨を待っている家族たち。康太と優人が2人で話している。

優人「さっきはありがとう」

康太「いやいや全然。。。最後に会ったの、優人が小4?

のときだから、12年ぶり？」

優人「12年だね」

康太「背、めちゃくちゃ大きくなったな」

優人「中高で30センチ伸びた」

康太「すごい」

優人「そうだ、観たよ、ドラマ。すごいね」

康太「もうほんのちよっとだけど」

優人「やりたいことあるのがすごいよ。(僕は)ないよ」

康太「(優人から、どこか諦念を感じる)」

○火葬場・出口（昼）

納骨後。やり終えた開放感もあり、話したりない  
様子の薫。

由加里「お母さん、もうその話聞いたからー」

薫「そこのお惣菜、本当においしいから。買って帰りな

さい。晩御飯も済むから」

景子「ありがとう、今日は家事したくないから、ウチも  
買って帰る」

由加里「姉さん、あと任せちゃって大丈夫？」

景子「大丈夫。身体気を付けて」

由加里「姉さんも。康太もまたね」

康太「うん」

優人「（軽く会釈）」

駐車場へ向かう優人と由加里。

康太「（優人が気になる）」

2人を追いかける康太。

康太「（追いついて、優人に）あのさ」

○錦糸町・駅前（日替わり・夜）

優人を待っている康太。

康太「（そわそわしている）」

優人「康太くん」

振り返ると、優人がいる。

康太「お、おう」

○居酒屋

メニュー表を見ている康太と優人。

康太「・・・お酒？」

優人「うんうん」

康太「何飲む？」

優人「最初はビールで。康太くんは？」

康太「(ビールは苦手だが) そうね、俺も最初は。ごはんは？嫌いな物あったっけ」

優人「魚。でも焼き魚はいける。刺身と寿司はダメ」

康太「あー、だったね」

優人「康太くんは何ダメだっけ？」

康太「豆、くるみ、落花生はずっとダメ」

優人「でもアレルギーじゃないんだよね」

康太「うん、だけど食べると気持ち悪くなる」

優人「そうだそうだ、思い出した」

笑う2人。

康太「とりあえず先飲み物頼もうか(店員に) すいませーん」

店員、返事をし、駆け寄ってくる。

優人「声通るね、さすが役者さん」

康太「いや全然・・・」

×

×

×

1時間後。程よくお酒が入った状態の康太と優人。



優人「一生続くと思ったらもう限界で、そいつ殴ったら退学。その影響でバイトもクビになって。その翌週にマンションの隣の部屋が火事になって、巻き込まれて」

康太「え？それ全部高校3の冬？」

優人「そうそう」

康太「でも殴ったのはそいつがいじめてたからだよね」

優人「うん。でも殴っちゃったから。結局、専門学校も行けないってなって、今の職場で働くことになったんだけど、まあそこも色々あって・・・、とりあえず月残業が60時間。計上されないやつ」

康太「すごいね・・・」

優人「でもこのまえ康太くんドラマで見たとき、超元氣もらったよ。家族が知らない場所で戦ってたんだって。嬉しくなった」

康太「優人の力になれなかった情けなさと、ほんの少しの出番でも誰かの力になれてることを初めて実感する」

×

×

×

1時間後。だいぶ酔っている2人。

康太「え！？何日目？」

優人「え何日目だろ、クリーズが出てた日」

康太「俺もその日！」

優人「じゃあすれちがってたかもだ」

康太「でもこんなに背伸びてたら気づかない」

優人「そうだよね、でもあの日いたんだー。すごっ、い

とこの DNAだ」

康太「同じ日に同じフェス行ってたのは、すごい偶然だね。しかもお互い1人」

優人「友達いないから、誘えばよかったー」

康太「同じく」

優人「毎日1人過ぎて希望がない」

康太「・・・でも名作も名画も名曲も、99%は、1人でいるときにアイデアが浮かんで、ゼロイチにする作業は1人でして、生まれたものだから・・・だから1人って、えっと（続きを思い出そうとして）」

優人「それ、康太くんが出たドラマのセリフ？」

康太「・・・いじってる？」

優人「ちがうちがう！なんかドラマのセリフっぽいなって」

康太「（笑って）小説だよ」

優人「なんの小説？」

康太、バッグから文庫本を取り出し、優人に渡す。

優人「難しそっ」

パラパラとめくる優人。

優人「どうしたの、このページ？」

変に皺のついたページだ。

康太「これはね・・・」

優人「あ、99%書いてた！でも皺でめっちゃ読みづらい（笑）」

今ここにあるモノで、ページの皺をなんとか伸ばそうとする優人。

康太「無理だよ」と言いながらその姿を微笑ましく見る」

× × ×

レジ前。お会計をしようとしている康太と優人。

康太「先出でていいよ」

優人「いやいやいやいや」

康太「年上のいとこですから」

優人「じゃあ・・・ありがとう」

先に店を出る優人。

店員「ありがとうございます。5千8百円です」

康太、迷って。

康太「・・・全額ポイント払ってできますか？」

○錦糸町・駅前（夜）

駅へ歩いている康太と優人。到着し。

優人「本、ありがとう。皺直ったら連絡するね」

康太「読み終わったらいいいよ」

優人「そうだった。そのときはまた飲もう」

康太「うん。墨田の方だね（調べながら）この時間な

らまだ終バスあると思う。バスなら一本で帰れる？」

優人「うん」

バスの時刻表を見に行く康太。

優人「（その姿に嬉しい）」

康太「（戻って来て）まだ全然バスあった」

優人「康太くん、やっぱりヒーローだね」

康太「え？」

優人「ありがとう。声かけてくれなかったら、また会う

機会、無くなっただと思う」

康太「俺の方こそ話したかったから」

優人「すごい楽しかった。またほんとに。一人っ子で友

達もいないから絶対に」

康太「それは俺も」

優人「あと、今度おばあちゃんち、一緒に行きたい」

康太「行こう」

バス停へ向かう優人。その姿を見守る康太。

おわり